

# 大滝伊久男先生の人と業績

石 毛 雅 章

このたび、本学名誉教授大滝伊久男先生の退職記念号刊行にあたり、表題執筆を依頼された。大先輩のたどられた半生を記すなど、若輩の筆者にとってまことに僭越なことではあるが、これまでのご指導に対するせめてもの感謝の気持ちを表させていただこうと思い、お受けすることとした。

大滝伊久男先生は昭和10年に東京の下町、墨田区でお生まれになった。この年代と場所から察せられるとおり、先生の越し方は決して平坦なものではなかった。絵に描いたような幸せな下町の子供時代は、昭和20年の下町大空襲であつというまに終わりを告げてしまう。幸い一家全員が無事だったものの、その後は住むところとてままならぬ苦難の生活を強いられることになる。

その中で先生は本田中学校、そして深川高校へと進学される。幼少のころから読書好きだった先生にとって、当時は思うように本の読めないことが相当の苦痛であったが、それをいくぶんなりと緩和してくれたのが貸本屋であった。山中峯太郎、川口松太郎、小島政次郎、中里介山、大仏次郎、谷崎潤一郎等々の作家の作品をむさぼるように読まれたとのことである。

小説への傾倒と同時に大滝少年に芽生えたのはアメリカへの憧憬であった。空襲の中を命がけで逃げ惑った体験を凌駕するほどにアメリカの圧倒的な力と豊かさに強く心惹かれたのであった。いつしか少年はアメリカ文学を志すようになる。

昭和29年先生は立教大学文学部英米文学科に入学された。当時はドス・パソス、フォークナー、ヘミングウェイなどの作家が研究対象として主流となっていたが、先生は余人のとりあげない作家を研究したいと思われ、シンクレア・ルイスを選ばれた。ルイスはすでに1930年にノーベル文学賞を受賞しており、世界的に有名な作

家であったが、なぜか日本ではあまり注目されずにいた。先生はルイスの作品において、個人が偏見などの社会的な問題を暴き立てるところが面白いと感じられたそうである。当時日本にはルイスに関する参考書などほとんどなく、苦勞したものの、自分の考えを自由に書くという点ではかえって恵まれていたのかもしれない。

現在まで続く趣味である映画に足繁く通われたのもこのころのことである。アメリカへの渡航など想像もできなかった時代、実際のアメリカ文化を知ることのできる唯一の手段は映画ぐらいのものであったからだ。

昭和33年先生は立教大学文学部英米文学科を卒業された。しかし、ご両親を続けて亡くされるなどの諸事情から、すぐに大学院に進学することもならず、やがて医療機器メーカーに就職されることになる。持ち前の英語力を生かした貿易業務を担当なさったのだが、どうしてもサラリーマン生活になじむことができず、たまたま機会のあった教職へと転職なさることになる。昭和38年、長野県松本市の松商学園短期大学に専任講師として赴任されるのである。

松商学園短期大学は戦後できたばかりの小さな短大で、研究面、教育面においてもその設備は十分整っていなかった。地元の商家の子弟が多い学生たちはまじめで熱心であり、英語の好きな学生が若い教師のまわりに集まって学習会を持つなど、教育者としてやりがいのある環境ではあった。しかし、付属高校も兼任で教えるなど、その待遇は満足なものとは言えず、さらなるキャリアアップをはたすべく、先生は大学院進学を考えられるようになる。

昭和40年に先生は立教大学大学院文学研究科修士課程に進まれた。学部では十分に研究することのできなかったシンクレア・ルイスをテーマに選ばれたのは言うまでもない。昭和43年に同課程を修了された後、先生は比較的順調な道を歩まれることになる。日大、都留文化大、東海大などの非常勤講師を経て、昭和45年に千葉商科大学専任講師に任用されるのである。

当時千葉商科大学は創立以来20年を経ていたが、教育環境は現在ほどに整備されていたわけではなかった。今の7号館付近にこじんまりとした旧図書館があり、現図書館付近は更地でなにもなかった。校舎こそ学生数にみあうだけは確保されていたものの、内部の設備はまだまだ十分なものとはいえなかった。しかし、そのような中にあっても、向学心に燃える学生の数は、今よりもずっと多かったのではない

か、と先生は述懐される。

当時商大の英語科を実質的に担われていたのは、若手の奥田俊介先生（現・本学名誉教授）と芹川和之先生（同）であった。大滝先生もその一角に加われ、以降本学の英語教育に尽力されることになる。

先生の講読の授業は、その緻密さで知られるところであるが、先生が英語教育において目標とされることは、何にもまして英文をしっかりと理解することである。そのためには基礎を完全にマスターしていなければならないし、辞書もこまめにひかなければならない。このあたりまえのことができない、或いはその労を惜しむ学生が少なからず見受けられるのは残念だ、と先生はおっしゃる。

千葉商大における大滝先生の主たる業績はシンクレア・ルイスの主要作品についての論考である。それらは千葉商大論叢および千葉商大紀要にそれぞれ『シンクレア・ルイスの小説(1)～(3)』ならびに『シンクレア・ルイスの小説のテーマについて』、『エルマー・ガントリーの俗性について(1), (2)』として掲載された。これらの論考において、大滝先生はルイス作品を構成する二極構造について論じておられる。『メイン・ストリート』における、小さな田舎町の頑迷さや固陋と、それに立ち向かう理想家肌のヒロイン、そして『バビット』における小市民社会と、そのモラルに妥協し続けることが苦痛になった主人公との対立、ついで『アロウスミス』における医学界の世俗的立身出世主義と学究的な医学徒、『エルマー・ガントリー』における俗物牧師の権化とも言うべきガントリーとその対極にある聖職者シャラード。ルイス作品において、これらの対立の構図の中から、一見すると豊かなアメリカ社会の「現実」が浮かび上がってくる様を、大滝先生は実に見事に描き出しておられる。

昭和57年に先生はアメリカ合衆国オレゴン州の州都セーラムにあるウィラメット大学に留学された。セーラムは人口5万の静かな街で、日本人はほとんどおらず、アメリカでの生活を身をもって知ることを留学の目的とされた先生にとってうってつけの環境であった。適切な住宅を探すのを手伝ってくれた不動産業の婦人や、下町なまりの英語には悩まされたものの、なにくれとなく世話を焼いてくれたアパートの管理人夫妻など、今も手紙をやりとりするほど親しくなった人たちと知り合えたことも、研究の成果に優るとも劣らない大きな収穫であったと先生はおっしゃる。

英語世界の実態を、その一端なりとも、文字からの情報でなく実感として知りえたことは、その後の授業に大いに役立ったことは言うまでもない。

お若いころから、先生の一番の趣味は登山であった。しかし、体調を崩されてからはそれがままならなくなり、「日本百名山」のうち50ほどしか登頂できなかったことを残念に思われている。そのほか先生は先ほど述べた映画の他に音楽と美術を楽しみとされていて、本学の専任を退かれた今、自由な時間が増え、演奏会や美術館に気兼ねなく通えることが何よりうれしいとおっしゃっている。

先生は教育における長年の功勞に対し、千葉学園より平成2年に永年勤続表彰(20年)を、平成12年に同30年表彰を受けられた。また、平成16年には千葉県より千葉県私学教育功勞者表彰を受けられている。平成17年4月には千葉商科大学より名誉教授の称号が授与された。

大滝先生が今後も健康に十分にご配慮なされた上で、大いにご活躍くださることをお祈りしたい。

なお本稿の執筆にあたり、秋の一日、御授業の終了後、お疲れのところをいろいろとお話くださった大滝先生に感謝いたします。